



日本記者クラブ

2020 年度日本記者クラブ賞 受賞記念講演会

科学と社会の営みはつながっている

青野由利・毎日新聞論説室専門編集委員

2020 年 7 月 29 日

青野由利氏は30年以上にわたり、科学報道の第一線で精力的に取材を続けてきた。生命科学から宇宙論まで科学の各分野を分かりやすく解説するだけでなく、「科学と社会との接点」を常に意識した姿勢が高く評価され、2020年度日本記者クラブ賞を受賞した。講演では科学記者としての取材や悩み、連載コラム「土記」のエピソードなどをユーモアを交えて語った。

司会：土生修一 日本記者クラブ専務理事・事務局長

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

青野由利・毎日新聞論説室専門編集委員 きょうは、コロナ時代にふさわしい無観客の講演会ということで、何か勝手が違って、かえってとても緊張してしまうのですが、皆さんはZoomのそちら側でくつろいでお聞きいただければと思います。

受賞記念講演ということで、何をお話しすればいいのか大変悩みました。それというのも、私がふだん聞き慣れている受賞記念講演は、例えばノーベル賞のように科学者が大変立派な業績を上げて、それに至るまでの道はこんなだったというのを話しになる、あとはその中身を話すというようなものなのですが、私にはそんなものは何もありませんので、何をお話ししたものかと随分悩みました。

いいアイデアはなくて、過去の受賞者の講演会をばらばらと見てみたのですが、その中に、数年前、受賞者に司会者の方が質問をするという形で開かれたことがあったのです。それを見て、あ、うらやましいな、これをお願いすべきだったと思わず思ったのですが、時はすでに遅しということで、それはできない。かわりに、私が取材者だったらこういう人には何を聞くかなということを考えて、お話をさせていただこうと思います。

きょうはメモを作ってしまった。それを見るには眼鏡が必要なので、眼鏡をかけさせていただきます。

まず最初に、なぜ理系の学部を出て新聞記者になったのか。次に、科学記者としてどういう仕事をしてきたか。さらに、科学と一般社会の接点をどのように意識して、どのように書くかとしてきたか。それに、受賞の理由に挙げていただいたコラムの「土記」はどういうふうに書いているか、何を心がけて書いているか、というようなことをお話しさせていただきたいと思います。

なぜ科学記者になったのか

まず、なぜ科学記者になったのかです。いろいろ理由はあるのですが、最大の理由は、実験が下手だったということです。大学は理系

で、薬学部というところに進学して、漠然と研究者になろうと生きていたわけです。それが3年生になって、見事につまずきました。

理科系の人みんなそうだと思うのですが、3年生になると午前中は座学で、午後はみんな学生実習という名の実験をするのです。いろいろな実験を次から次へとやって、基礎をたたき込むのですが、それをみんな一斉にやるのです。学部に70人いたのですが、みんな一斉に同じ実験をします。中には、あっという間に実験を終えて、ちゃんと結果を出して、「じゃあね」と言ってクラブ活動に行ってしまう人がいる。その一方で、私はほとんど毎日のように居残りで、いつまでたっても終わらない。これは本当に研究者としてはやっていられないのではないか、こう思いました。

では、何で新聞記者なのかというのは随分飛躍があると思うのですが、当時はまだ雇用機会均等法はなく、4年制の大学を卒業した女子は門前払いということが結構あったのです。例えば日本の製薬企業の多くもそうでした。「募集していません」ということで門前払いをされるのです。そういうところがいっぱいありました。そういう中であって、新聞社というところは、一応誰でも、女子でも受けられたということがあって、それが一つの理由です。

ほかにも理由は幾つかあるのですが、例えば文章を書くことには興味がありました。そういうことで試験を受けて、運よく採っていただいて、最初は横浜支局で警察を回っていました。その後、社会部へ行って、都庁の記者クラブや、都内の支局などで仕事をし、その後科学部、いまの科学環境部というところに配属になって、その後ずっと科学記者をしています。

これだけだと、私一人の経験で、あまりにも偏っているので、試しに周りにいる、科学系の大学で科学系の分野を専攻して新聞記者になった人たちに聞いてみました。

内訳は、30代から50代、男子6人、女子3人。出身は、なぜか理学部系の、特に物理が多い。もちろん、これはただ周りに聞いただけですから、統計的には何の意味もないのですが、

興味深いのでちょっとご紹介すると、「学生のときに研究者になろうと思っていたか」という質問に、9人中8人が「イエス」と答えています。

では、なぜ研究者じゃなくて、新聞記者になったかはいろいろなのですけども、「実験室と自宅の往復だけの生活に疲れた」「研究活動が重箱の隅をつつくようで楽しくなくなった」「実験室にずっとこもる生活に疑問を感じた」「先輩を見ていると、一人立ちするまでに大変そうだった」「優秀な先輩でもポストを得るのに苦労している」、そんなようなことがみんなあって、「うーん、どうしようかな」と思っただけです。

一方で、「科学の話題に何らかの形で関わっていきたくかった」「研究室の先輩に新聞記者がいた」「温暖化を扱ったNHKスペシャルを見て、おもしろそうだった」「大学に科学コミュニケーションの講座があって、それを受けたらおもしろかった」とか。

あと、「自分は科学が好きだった。社会には自分の知らない科学がたくさんあると思って新聞記者を選んだ」、それから、「理系の社会で常識的なことも、一般社会では認識されていないことがたくさんあることに気づいてこの道を選んだ」という人もいました。

「記者になってよかったか」という質問には、ほとんどの人が「よかった」と答えていて、「研究者になればよかった」と答えた人は一人もいませんでした。

ただ、実は私自身は、この質問には「うーん、微妙」というのが答えなんです。研究者も向かないなと思ったのですが、新聞社に入ってから、この仕事も向かないなと随分長く思っていたので、腰が落ち着いたのは結構最近になってからです。

ですから、この賞をいただけることになったときに、「え、本当に私でいいんですか」と思って、いまでもそういう気分があるのです。それというのも、歴代の受賞者の方たちは、多くがジャーナリストになろうと思って、なるべくしてなった方々ですけども、私はそうではな

いので、「いいんですか？」という気持ちがいまだにあります。

あらゆる分野を取材する毎日

次に、「科学記者としてどういう仕事をしてきたか」。私、最初に、昔は科学部と言いましたが、科学環境部というところで仕事をしていて、その後、論説室に配属になったのですが、かなり仕事の中身が違いました。毎日新聞に科学部、いまの科学環境部が発足したのは1984年のことです。そのときに私も配属になりました。当時は、部長1人、デスク1人、部員7人の合計9人しかいませんでした。それで全てを回していたわけです。

周りからは、何か難しいことを書いているよく分からない人たち、という雰囲気で見られていたような気がしますし、世間一般からは、科学面を書いている人だと思われていたと思います。もちろん科学面も書きますけれども、それだけではなくて、1面から、社会面から、中の総合面から何でも書く。普通の、ほかの分野と変わらない記者なんですよ、という話を時々周囲の人にもしていたことを思い出します。

「どんなテーマを書いてきたか」ですけども、科学部、科学環境部では、1年とか2年ごとに分野をローテーションして行って、最終的にはどの分野でもカバーできるようにする、そういうやり方がありました。ですから私も、ローテーションして行って、いろんな分野をカバーしてきました。私は決して特ダネ記者ではありませんので、満遍なく地道に、科学とか医学とかと名のつくものは何でも取材してきたという感じです。

振り返ってみると、1980年代だと、脳死とか臓器移植とか、ハレー彗星とか、超新星爆発ですとか。90年代に入ると、ヒトゲノム計画。あと火山担当になった途端に雲仙普賢岳が噴火したので、それもあり一生懸命取材したことを覚えています。それに遺伝子治療などですね。

向井千秋さんが最初にスペースシャトルに

搭乗したときの担当になって、これをカバーしたこともありました。このころから感染症は重要なテーマで、新興・再興感染症をカバーするのに、ジュネーブのWHOとか、パリのパスツール研究所とかに取材に行く機会もありました。当時の経験は、新型コロナの問題が起きているいまも参考になっています。

それからクローン羊・ドリーの誕生、これはかなり衝撃的であったことを覚えています。それから、ノーベル賞につながったニュートリノ振動であるとか。

2000年代に入ると、再生医療が結構テーマになって、連載をしたことがあるのですが、これも、これが本当に大変な連載でした。毎日、終電には決して帰れません、みたいな日々を結構長いこと過ごしたことを覚えています。

そこへiPS細胞が登場したり、新型インフルエンザのパンデミックが起きたり。それから2000年代の前半になって、論説室に配属になって、2011年には東日本大震災、原発過酷事故が起きることになります。

個人的には、生命科学とか、生命倫理とか、天文学とかが好きだったので、満遍なくやりました。科学記者の基本動作、ルーティンワークは何かというと、まず、学会をはじめとする学術集会をカバーすることなのです。

学会の総会というのは春と秋にたくさんあるので、それをリストアップして、抄録を取り寄せるのです。予稿集です。それを机の上に山のように積んで、次々これを読むとか眺めていくわけです。これは重要だとか、おもしろいとか思う発表があれば、その研究者にコンタクトして取材したり、実際に学会の現場に出かけたりします。様々な分野のトレンドが何か、重要なキーパーソンが誰かということ、ここから学んでいくのがルーティンワークの一つです。日常的にも研究室を回って、科学者の方々とお話をし、お医者さんともお話をしてきました。論文を読むことも重要な科学記者のルーティンワークです。

あるときから、「ネイチャー」や「サイエンス」や「セル」という、皆さんもお聞きになる

こともあるような権威ある論文誌、それだけではなくて、いろいろな論文誌が、エンバーゴ付き、つまり解禁日付きのプレスリリースをじゃんじゃか出すようになりまして、科学記者はそれに追いまくられるというようなことがありました。みずからニュースを発掘していくという醍醐味が失われたのではないかというのは、私ぐらいの年代の他社の科学記者などと話すと、繰り返すように言われることです。

このように振り返ってみますと、1980年代に科学記者を始めたわけですが、そのときには大変マイナーだった科学報道が徐々に重要視されていくことを私は肌でも感じてきたと思います。

きっかけは幾つもあると思うのですが、例えば気候変動、温暖化で1997年に京都議定書が採択されることになります。この温暖化、気候変動というのは科学だけではなくて、政治や経済など、全てのことが関わるわけですが、そこにあつて科学報道の重要性が一つクローズアップされたかなと思います。もう一つは、2011年の東日本大震災と原発過酷事故であったと思います。

「現在はどうなりましたか」ですが、毎日新聞で科学報道に携わる記者は、科学環境部が総勢17人、それとは別に、くらし医療部というのがあって、ここも20人ぐらいいますので、40人弱の人たちが科学とか医学の報道に関わっていることになります。隔世の感があるな、と思います。

「分かりやすさ」と「正確さ」

次に、「科学と一般社会の接点をどのように意識して、どのように書こうとしてきたか」。これは自分で立てた問いであるにもかかわらず、「難しい質問ですね」という答えになってしまいます。先ほど科学環境部で仕事をしていたころの話をしましたが、そのころと、論説室に配属になってからは、視点が変わったなという気がします。

科学環境部にいたころは、社会と科学をつなぐということ、科学と一般の市民の間をつなぐと

ということで、例えば研究の最先端を分かりやすく紹介するとか、その位置づけを示すとか、先端科学が社会や人間とどう関わるかという解説をよく書いていたと思うのです。考える材料を提供するとか、社会的な受容、パブリックアクセプタンス、これについて方向性とかオピニオンを提示するような、科学の世界と一般の市民の間の橋渡しをする、といったことを考えていたような気がするのです。

一方で、私たちの仕事は、単に研究者が伝えてほしいことを伝えるだけではない、ということもよく思っていました。以前、大学とか学会でお話をさせていただく機会があったとき、メディアの立場で何か話してくれということがあって、よく「科学記者への誤解」というスライドを1枚出していました。それは、例えば「新聞記事は論文ではありません」とか、「新聞は広報誌ではありません。皆さんの広報をするものではありません」「科学記者は単なる翻訳者ではありません」「科学記者と研究者の専門性は異なるんですよ」とか。よく「欧米の科学ジャーナリズムはすごいよね。日本はだめだよ」という言い方をされたのですが、「その根拠は何ですか」と結構反論もしました。もちろんそれだけではなく、「科学技術政策の評価とか監視とか、そういうことも仕事なんですよ」というようなお話をしていたことを思い出します。

そういう中で、常に意識していた科学記者の悩みというのがあります。多分、科学記者は皆さん誰でもそうだと思うのですが、分かりやすさと正確さを常にてんびんにかけなくてはならない、ということです。分かりやすくしすぎると正確さが損なわれて、正確さを尊重すると、何を言っているのか分からない、ということになります。その微妙なバランスをどう取っていくのが科学記者にとっては常に課題で、それをやってきたおかげで、正確さを極力保ちながら、一般の人にも伝わるように書くという訓練を積むことができたのではないかとはいっています。

よく「科学記事は難しいよね」と言う方がいるのですが、私に言わせれば、政治とか経済の記事のほうがよっぽど難しくて分かり

にくい。それは多分、政治とか経済の話は誰でも分かっているはずのものだと皆さんが思っているので、「難しいよね」とも、「分からないよね」とも言いづらいのではないかと。

科学の話は、「難しいよね」とか「分からないよね」とか、多分とても言いやすい分野なのではないか。そう言われるおかげで、「いやいや、分かりやすく書きますよ。でも正確にも書きますよ」ということが訓練されてきたのではないかなと思います。そう言うと、政治や経済の方々には怒られるかもしれませんが、その辺がちよっと違うのではないかなと思っています。

科学と社会の営みは不可分

次に、論説室に配属されてからです。メディアの方は皆さんご存じで、説明するまでもないのですが、主に社説、社論を書いている部署です。ここには様々な分野の専門記者が集まっています。中でもメインストリームは政治、経済、外交です。

私が論説室に配属になったのは、いまから17~18年前だと思うのですが、当時、副委員長の一人から言われた言葉が忘れられないのですが、「論説室というところは、政治、経済、外交、あとはその他なんだよ」と。あ、なるほどと思った。いまでこそ科学担当の論説委員は2人いるのですが、当時は1人です。実は原発事故が起きるまではずっと1人で、私の前も1人で、全ての科学、医学、環境などの分野をカバーしていたわけです。

論説室というところは毎日毎日、論説会議というのを開いて、その日の社説をどう書くかを議論して決めます。政治、経済、外交の人たちがいろんな論を展開する中で、そこでいろんな話を聞く中で、政治も経済も外交も含めて、あらゆることの背景には科学があるんだな、科学そのものでなくても科学的な思考というのが必要なんだな、と感じるようになりました。ところが、そうであるにもかかわらず、科学とか科学的思考というのは軽視されている、と感じるようになりました。

例えば不正であるとか、科学の世界だったら一発で失脚して科学者生命を奪われるというようなことがあっても、政治家だと、それがどこ吹く風というか、そのままあまり追及されなかつたりということもありますし、追及されても平気だつたりということもあります。エビデンスのはっきりしない政策、根拠のはっきりしない政策に巨額のお金を投資することは、いまでもやられていると思うのですけれども、それでも平然としているとか。

よく医学で「Evidence-Based Medicine」、根拠に基づく医学と言われますけれども、科学でもそうです。根拠に基づいていないものは、やはり相手にされません。しかも科学の世界だと必ずピアレビュー（peer review）というものがあって、専門家同士の間でレビューするんですね。そういう過程を経て論文になるのです。

私はそういう世界に慣れていたので、とても居心地が悪いとか、気持ちが悪いということが多くなったのも論説室に来てからです。ほかに、例えば安全保障の技術でも、工学の視点からどうなのかというのが常に気になるわけですが、そういうことをすっ飛ばして話が進むことがあって、その辺が釈然としないことがありました。

さらに、科学と政治や経済のギャップを強く意識せざるを得ない出来事が起きたのが、東日本大震災と原発事故でした。このときは、科学的、技術的な判断よりも政治的、経済的判断が優先されてきたからこういうことにつながったのだと思いました。一方で、リスクについては科学記者として書いてきたとは思いますが、結局のところは、それによって安全対策を変えることもできなかったわけですし、力不足であったわけです。そういう意味では科学記者にも責任があると痛感し、科学記者は逃げられないと思って、積極的に——私はこの分野が決して得意な分野ではなかったのですが——科学の視点から原発とかエネルギー政策を書くように心がけてきました。

そういうこともあって、あらゆる社会の営みに科学は関係しているはずだという視点で考えるようになったのは、論説室で様々な専門記

者と議論を交わしたおかげだと思っています。

コラムの“切り口”

最後に、受賞理由にも挙げていただいたコラム「土記」はどう書いているのか、何を心がけて書いているかという話をしようと思います。

その前に、「土記」というのはどういう意味？とよく聞かれることがあるので、最初にお話しします。「土記」というのは土曜の朝刊に載るのですけれども、火、水、木、金曜日に「火論」「水説」「木語」「金言」という4つの朝刊のコラムがまずあって、それは、それこそ外交の人とか、経済の人とか、別の分野の人たちが書いていたわけです。

日替わりコラムができて6年ぐらいて、科学担当の「土記」を作っていただいたわけです。それまでのルールが、火、水、木、金に、言べんのつく漢字を入れるという——皆さん気がついていのかどうか分かりませんが——そういうルールで成り立っているのです。だから、土曜の「土」に言べんの何かを加えるということで、これは大変難しい話だったのですが、最終的には「土記」になった、というのが由来です。

話を戻して、コラムというものをどう書いているのかということですが、夕刊に「憂楽帳」というコラムがありまして、1997年10月から3カ月間、毎週書いたのが定期的なコラムを書いた最初でした。

当時、コラムとは何？ コラムというのはどうやって書くの？と、本当に分かりませんでした。ですので、ほかのコラムニストとか、エッセイスト、この人はコラムがうまいと思う人たちが書いているものを手当たり次第乱読してみて、何となくこういうものなのかと思って書き始めました。

もちろん、ネタになりそうなものは常にメモしておくという習慣もこのときに身につけました。あるネタがあったら、その周辺をちょっと取材してみることで、全く別の視点や別のネタ、別の切り口が出てきて、ほかに発展していくということが分かったのもこのときです。

実を言うと、新聞社に入ったときに、「切り口」というのは何のことをみんなが言っているのか全く分からなかったのです。コラムを書くようになって、何となくこういうことをみんな切り口と言っているんだなと——いま説明してくれと言われてもなかなか言えないのですが——そういうふうを感じるようになりました。

その次に、「発信箱」という、「憂楽帳」よりはちょっと長くて、いまの「土記」よりはちょっと短いコラムを2002年7月から2016年3月まで、時々中断したり、週一だったものが隔週になったり、月一になったりしながら、全部で250~260回書いたと思います。このときにも、コラムを書き続けるというリズムみたいなものを学びました。

それから、2011年12月から2016年3月まで、科学面に、「3・11後のサイエンス」という結構長めのコラムを連載しました。震災と原発事故が起きて、原発についても、地震についても、地震国日本のことについても、科学記者として書かなくてはならないという義務感のようなものがあって、全部で49回書きました。

それから、2016年4月から「土記」を書き始めて、先週までに200回以上書いています。

どんなものを書いてきたか。今年に入ってから私は私、完全に新型コロナに集中しているので、読者の方々は「またコロナですか」「たまにはほかのことを書いてください」とか、「いいかげんにしろよ」とか思っている方もいるかもしれません。きょうは水曜ですね、水曜日というのはまだ心に落ち着きがありますが、あした木曜の同じ時間になると、私はお尻がそわそわして、あ、どうしよう、何を書こうということになっているはずです。まだ何を書こうか決まっていないので、今週、コロナなのかどうかは分かりません。ただ、いずれにしても興味の対象がいまそこにあるのは確かなので、ずっとかどうかまだ分かりませんが、おそらく書いていくと思います。

では、過去にどういうものを書いてきたか。自分では忘れてしまうので、試しに2018年か

ら2019年末までの2年間を分類してみました。

2年間を自分で勝手に分類した結果は、「原発・エネルギー政策」が17回、「生命操作・生命倫理」が13回、「政治・経済」が12回、「研究者・科学者」が12回、「天文・宇宙」が8回、「動植物」関係が6回、「戦争」関係が4回、「感染症」が4回でした。

他に、自分で勝手に「浮世離れもの」と分類したものが——浮世離れしたものを書くのが好きなので——7回。で、「その他」が21回ありました。例えば動植物ものの中にも浮世離れしたものが結構入っていたりするので、きっちり分類できないのですけれども、こんな感じで書いてきました。

具体的にどんな話かということですが、もちろん、当然ですが、本紙には普通書かれない話です。一見科学とは関係ないけれども、科学が潜んでいる話。科学的に考える、エビデンスをきちんと考えると、これっておかしいんじゃないですか、というような話。

あと、複合的な話。これは、ある科学的な話が別の話とつながっているような、科学じゃない話題ともつながるし、別の科学ともつながるような話ですね。

それから、純粹に楽しい話ですね。楽しいけれども、人間や社会について考えるきっかけが潜んでいるような話。

脚光を浴びた科学者の陰にいるような人の話も好みで、そういうものも書いてきました。

常に新しい話を提供したい

では、どうやって書いているか。これは改めて聞かれてもよく分からないのですが、ただ、何となくいつも頭の片隅にポワポワと何かを浮かべておいて、何となく形になってきたら、それに必要な取材をします。コラムニストの中には、直前に一気に書くとおっしゃる方もいますけれども、私はそこまでのことはできないので、木曜の夜には何かある程度の形になって、金曜日に完成させて出稿する、ということを繰り返しています。

書くときに何を心がけているかですけれども、当然ですが、切り口だけではなくて、新しいデータ、新しい話を提供する。それと、正確さと伝わりやすさのバランスを常に考えるというのは、さっき申しあげたことと同じです。

ただ、普通の科学記事に比べると、コラムのほうが、「エイヤッ」と書くことができ、書きやすいと思うこともあります。

今回、受賞のお祝いメールをくださった取材先の中に、私からかつてこう言われたと書いてくださった方がいます。私が何と言ったかという、「正確な表現にこだわり過ぎて読者に伝わらなかったら、書かなかったことと同じなんですよ」と。相手は研究者の方というか、NPOの方なんですけれども、正確な表現にこだわりがあったと思うのです。でも、私に「そう言っていたら伝わりません、それは書かなかったことと同じなんですよ」と言われたと。大変生意気な言い方ではあるのですが、そう思いながら書いています。

それから、データはおおもとに当たる。例えば、論文の話だったら、著者に当たるということです。それは国内だけではなくて、海外の著者であっても、そこはためらわずにメールをすることにしています。

科学者というのは、日本の誰とも分からない記者が聞いてきたメールにちゃんと答えてくれる人たちがとても多いです。日本の科学者もそうなのかもしれません。それは大変助かることです。

さらに、同じ分野の別の人にも聞いてみる。これはほかの科学記事の基本でもあるわけですね。

ですから、たった一つのコラムを書くのに、何人にも話を聞いて、結果的には、誰のお名前も使っていないということがあったり、使うとしてもお一人しか使っていないとか、そういうことがあります。

もう一つ、「社説にならないようにする」というのがあります。どういうことかという、社説と普通の記事の書き方は本当に違うのですけれども、社説を書き慣れると、うっかり社

説っぽいコラムを書いてしまうことがあるのです。でも、これはだめです。

実は昨年まで、机を並べていたのが経済専門記者の福本容子さんという人で、福本さんはコラムの「水説」を書いていました。コラム書きというのは結構孤独な作業なので、隣同士でああでもないこうでもないと言い合うのですが、時々、「あ、きょうはうっかり社説を書いちゃった」「だめじゃん」みたいな話をして戒め合うこともしていました。

科学の不確実性も伝えるようにしています。いま新型コロナを書いていてよく感じるのですけれども、科学が唯一の正解を持っているという誤解があると思うのです。例えば、ワイドショーなどを見ていると、時々、そう思っているのではないかなと思うことがある。けれども、そんなことはなくて、科学というのは非常に不確実な部分もあります。特に新しい感染症などと対峙しているときには、本当に分からないことだらけの積み重ねだし、そう簡単には一つの正解にはたどり着かない、そういうことも書くようにしています。

「土記」二百超の物語

では、具体的にどんなものを書いてきたかという話ですけれども、「九電やるじゃない」(2016年10月15日付)は原発・エネルギー政策です。九州電力は太陽光をいっぱい取り入れていて、これ以上入らないとか、変動する電源はもう入れられない、という話になるのですが、九州電力はとても上手に調整して、本当にうまく入れたという話で、「こういうことはやろうと思えばできるんですよね」、そういう話を書いてみたり。

「送電線『空きゼロ』の怪」(18年2月3日付)、これは(電力会社は)送電線が空いていないから再生可能エネルギーは入れられないと言うのですけれども、よく見ると——考え方の違いだったりするのですが——本当は空いていて、もっと入れられるじゃないですかとか。

「待てば待つほど」(18年7月28日付)は、「サンクコスト」の呪縛の話です。これは経済

学でよく使われる言葉なのですが、年月とお金をかけてしまうと、やめたくてもやめられないという。例えば私に言わせれば、日本の核燃料サイクルというのはそういうものだと思っているんですが、そういう脳の働きがマウスにもあるという話があって、それはおもしろいなと思って書きました。人間は、その辺は理性で何とかしたほうがいいんじゃないか、そういう話です。

生命操作とか生命倫理の話を書いた「家系サイトが暴く」(18年5月19日付)は、未解決の連続殺人の容疑者を逮捕したというアメリカの話なのですが、それに使った手法がもうびっくりするようなやり方でした。一般の人が自分の血縁者を探すために、自分のDNA情報をデータベースにアップするのです。そういうところから犯人、容疑者が捕まるというなかなか驚くような話で、DNAの個人情報はどうなのかな、といった話とか。

「幸福は編集できるか」(17年5月13日付)ですけれども、ゲノム編集という新しい技術が登場して、それこそ受精卵の段階から治療ができるとか、障害が治せるのではないとか、そういうことが議論されています。では、本当にそういう技術が人間の幸福まで編集できるのかという疑問の投げかけです。

政治経済もので「イージスのはかり間違い」(19年6月15日付)は随分話題になりましたけれども、彼らがグーグルアースを使ったというので、なんでアメリカのもの？ なんで日本の国土地理院のものを使わないの？ という疑問から、実際に自分でもグーグルアースを動かして、国土地理院のものも動かして、ちゃんと測れるじゃない、ということから説き起こしました。

「根拠に基づく政策」(19年2月9日付)は、さっき申しあげたことですがけれども、「Evidence-Based Policy Making」、エビデンス、根拠に基づいた政策が最近注目されているという話です。じゃ、いままでは全然そういうことに注目していなかったんですか、というようなことから書き起こしたコラムです。

あまり脚光を浴びない科学者のことを書くのが好きと言いましたが、「女性天文学者に献杯」(17年1月7日付)がそれです。この人、脚光を浴びていなかったわけではないのですけれども、ノーベル賞だと言われながら、結果的には受賞しなかったベラ・ルービンさんという、暗黒物質の発見に携わった人です。

「重力波の『巨人』たち」(17年10月7日付)は、重力波では3人がノーベル賞を取りましたけれども、実は、存命だったらこの人だったのではないかという、ちょっと変わった、人づき合いの悪い人なのですが、その人の話です。

あと、「チバニアン」で注目されるようになった地磁気逆転は、松山基範さんという人が最初に提唱しているのですが、この人も当時は全然見向きもされなかった人で、いまでもあまり注目されていない人です(「松山基範と地磁気逆転」(19年7月6日付))。

「戦没者遺骨どう返す」(19年8月24日付)は戦争もので、DNA鑑定の話なのですが、これも科学と戦後処理というか、戦没者の遺骨の話というのは常に気にかかっている、例えば、なぜ取り違えが起きるのかという話です。

「硫黄島のギンネム」(18年7月14日付)は、サイエンスそのものではないですが、硫黄島に行ったときに、島をギンネムという植物が覆っていたことがとても気になっていたもので、それを掘り起こしました。

植物動物もので、ちょっと浮世離れものでもあるのが、「ネズミと人間の旅路」(20年1月11日付)。実験用のマウスに、昔、日本でペットとして飼われていたネズミのDNAが入っているという話です。そこをたどると、壮大な人とネズミの世界を股にかけた旅の話が浮かび上がるという内容です。

「ミカンの来た道」(18年2月24日付)はミカンのオリジンはどこ？ という、身近な歴史の話です。

「謎のデニソワ人」(19年5月18日付)は、「浮世離れもの」と私が呼んでいるものです。デニソワ人はネアンデルタールと同時代を生きた古代人ですがけれども、彼らのDNAも現代人

の中に入っているという話がありまして、その辺から書きました。

『V』の歴史(19年3月23日付)は、「V」の発音ですね。これは海外の国の名前から、「ヴ」というのをなくすという話があったので、うーんと思って、「ヴ」というのは日本語にはないわけですけども、どういうふうに生じたのか、どういう歴史なのかを人類学的な話から説き起こしました。

ここまでが、こんなものを書いてきたというお話ですけども、ある意味では、いまご紹介したコラムはある程度自分でも気に入っているものです。ただ、コラムというのは本当に不思議なもので、自分では「今回は失敗した、ごめんなさい」、と手放したコラムが次の日に掲載されて、「よかったよ、あれは」という反応が返ってきたり、逆に、「よし、今回はちゃんと書けた」と思うものが、翌日掲載されると、「何だかよく分からなかったね」と言われたりということが結構あります。実は、さっき申しあげた、隣に座っていた福本容子さんも同じようなことを言っていましたので、コラムというのは結構そういうことがある。それも醍醐味なのかもしれません。

コラムはよくピンチがありまして、多分、あしたになるとまたピンチに陥っているのではないかと思います。実は先週もピンチで、木曜の夜までに、あ、これで書こうかなと思って、何となく補足取材もして、もう一人、この人に押さえでちゃんと取材しておこうと思って、木曜の夜に電話で取材先と話をしたら、もくろみがガラッと崩れて青ざめたということがあったのです。それでどうしたかと言うと、一応別のものを書いたのですけれども、あしたそういうことがないといいなと思っています。

そういう綱渡りの繰り返しですけども、今回の賞を励みに、これからも書いていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(質疑応答)

質問 (すべて Zoom) 来年度から新聞記者になる学生です。青野さんが記者に向いていないと思った理由と、なぜ向いていないと思った記者職を長年続けてこられたのかについて、伺いたいと思います。

青野 なぜ向いていないと思ったかは、いろいろあるのですけれども、そもそも、先ほどは申しあげませんでした。私が新聞記者を選んだ理由の一つは非常に逆説的で、人と話するのが苦手だということがありました。

新聞記者になってもそれは苦手で、取材先に話しに行くのがとても心理的に苦痛だった時期があって、例えば、最初に警察回りをしたわけですけども、全く性に合っていなかった。

やっぱり研究者になりたかったということもありました。科学記者というのは、ほかの研究者がやっている仕事、成果を書くだけなんです。自分がそれには関わっていない、当たり前なんですけれども。何となくそれがフラストレーションになって、向いてないと結構長いこと思っていました。

では、なぜそのまま続けてきたか。優柔不断だったからというのが一つの理由です。でも、いまにして思えば、書くということ、あとは科学が好きなんです。科学が好き。人によるかもしれませんが、科学者も好き、それを書くということも好きだから続けてこられたんだなと思っています。

質問 ベテランの科学記者がネットメディアに移ったりしていますが、ネットではない、伝統的な新聞社の強みは何ですか。

青野 難しい質問ですね。

私も新聞社で育てていただいたわけですが。記者を育てるという意味では、特に科学記者をネットメディアで一から育てられるのか、もしかすると「できる」とお叱りを受けるかもしれませんが、これまでのところを言えば、もちろんテレビもあるかもしれませんが、やはり専門記者、ジャーナリストを育成できるのが新聞社の強みだと思います。

質問 高校教師ですが、高校生にける言葉をいただけたら幸いです。

青野 高校生にける言葉ですか、それは科学記者としてということですよ。

科学、おもしろいですよ。能天気なお答えになるかもしれないですけども。

実は子どものころ、天文学者になりたかったんですけども、全然無理だと思って、大学ときには考えなかったんです。でも何か好きな分野があるなら無理と思わずに、やってみることだと思えます。高校生なら、いくらでも道は開けると思えます。

質問 科学の基本は仮説と検証の繰り返しだと思えます。しかし、文系の方々と話をしていると、本質的に現象となっていないようなことや、特殊事例を証拠として話を進めたりする人が多く、なかなか理解してもらえないことがあります。そうしたギャップを埋めていくためにメディアができることはあるのでしょうか。

青野 それは私もよく感じることです。書ける範囲では書いていこうとしていますけれども、多分、新聞メディアだけでは、それは解決できないと思えます。科学の考え方、論理的であること、仮説と検証、一つの例があってもそれで全てが説明できるわけではないのだということ、初等教育からみんなに納得してもらうことが必要ではないかと思えます。もちろんメディアもそのための努力はするのですけれども、なかなかメディアだけでは難しいと思えます。

質問 コロナ後の社会は暗いイメージが強い。しかし、明るい希望のある社会にしていこうためには、科学の役割は大きいと思う。そこで、否定論だけではなくて、もっとブラッシュアップできる政策を誘導していくこともメディアの役目だと考えます。

青野 もちろん、それは役割だと思えますが、いまその手前でかなり混乱が生じているという気がします。さっきも言ったように、科学はそんな簡単に一つの正解を持たないのですけれども、だったら、何が分かっている、何が分からないかということ、きちんと整理をすることは科学メディアの役割だと思えます。

司会＝土生修一・日本記者クラブ専務理事・

事務局長 コロナの話が出ましたが、今年の2月から、テレビ、新聞、ネットでほとんど毎日朝から晩までコロナ報道がされています。一つのテーマで長期間、しかも世界中で同じニュースが流れ続けたということは初めてだと思います。なかなか一言では難しいでしょうが、科学記者として、コロナ報道の現状について、良い点、悪い点というか、課題についていかがお考えでしょうか。

青野 課題はたくさんあって、いまここで一言で申しあげるのはなかなか難しく、1時間でも討論できるのではないかと思うようなテーマだと思えます。

科学があり、そこに政治も経済も絡むというテーマですよ。普通の国民の生活の在り方とか、これまでの社会の在り方とか、都市の問題とか環境の問題、あらゆることが関わるテーマなので、科学担当の記者だけではなくて、あらゆるメディアの人が、これを一つのきっかけに、報道の在り方を考えていく必要があると本当に思えます。

質問 これからの科学記者に必要なことは何でしょうか。

青野 先ほども申しあげたように、科学記者のルーティンワークもだんだん変わっていくんですね。世界の在り方に応じて変わっていくので、何が正解だということもないでしょうし、これまではやっていなかったけれども、これからは違う、というのは何ですかね。ごめんなさい、いまちょっとすぐには思いつかないですね。

先ほどネットメディアの話が出ましたが、ネットメディアの活用は一つ出てくると思えます。それはどれだけ分量が書けるかということとも大きく関わります。私は自分の原稿を削るのにすごく多くの時間を費やすので、縮めて、ぴったり納めるということ、その辺は変わっていくのかもしれないなと思えます。

司会 青野さんの取材相手である科学者は、一般には、言葉は悪いですが、専門バカみたいなイメージが強いのですけれども、ネットの時代を迎えたこともあり、最近では科学者自らが情

報を発信することも結構増えてきていると思います。青野さんから見て、科学者側の変化は感じられますか。

青野 それは本当にあると思います。私が科学記者を始めたころは、マスメディアに話をする事自体をすごくためらうというか、よくないことと思っている人も多かったです。ましてや自分から何かを一般に向けて発信することにためらいがあるとか、罪悪感があるとか、そういう科学者もいたと思いますが、それがガラッと変わったわけですね。そうすることが推奨されているからということもあるのですけれども、実際変わったなと思いますし、いいことだと思います。

司会 最後に、きょうは、サイエンスの専門教育は受けたことはないけれども、サイエンスには興味があるという方がたくさんご覧になっていると思います。1冊、2冊というのはなかなか難しいですけども、そういう人に、こういう本がおもしろいよというのがもしあれば。

青野 すごく難しいことを……。

司会 例えば、日本でも欧米でもいいですけども、お会いになったたくさんの科学者の中で、キャラクター的におもしろい、あるいはその人が書いている本はおもしろいということでも結構です。

青野 キャラクターがおもしろいとか、印象に残る人たちは本当にいっぱいいるので……。

しかも、科学者としておもしろいという人と、物を書くのがうまいということとは別問題なので、それはちょっとなかなか難しいなと思います。

ただ、取材に答えてくださるときに、分かりやすく教えてくれる科学者は、優秀な人が多いと私は実感しています。

司会 さっきおっしゃったように、正確さと分かりやすさが、科学者の中でも同居しているということですね。

青野 そういうことですね。科学者の気持ちはとてもよく分かって、正確な表現へのこだわりとか、それを逸脱して自分がコメントしてし

まったりすると、それは不正確だという思いにとられるとか、仲間からそう言われるとか、そういうことがあると思うのです。一方で、一般の人を念頭に置いたときに、どのようにそのバランスを取るかというのは、確かに私たちだけではなくて、科学者にも求められることです。ただ、それは科学者ができなくても、私たちがすることであるというふうにも思っています。

司会 ありがとうございます。

文責・日本記者クラブ